

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17286

研究課題名（和文）スクールソーシャルワークの配置類型から見た効果に関する研究

研究課題名（英文）A study on the effect of school social work in terms of placement patterns

研究代表者

山口 倫子（YAMAGUCHI, Noriko）

島根大学・学術研究院人間科学系・助教

研究者番号：30460637

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、スクールソーシャルワークの配置類型による効果の違いを明らかにするため、スクールソーシャルワーカー（以下SSWerとする）へのインタビュー調査を行い、定性的分析を行った。その結果、派遣型SSWerと配置型SSWerそれぞれの活動の構造を明らかにすることができた。また、両者をソーシャルワークの展開過程に照らして検討を行った結果、派遣型SSWerは、「限定されたソーシャルワーク」を実施していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでの先行研究で明らかにならなかった「配置型」と「派遣型」それぞれのSSWerの活動の構造を明らかにしたことである。特に派遣型SSWerは、モニタリングの実施にまで至らず、「限定されたソーシャルワーク」を実施し、必ずしもソーシャルワークの過程を踏んでいない可能性があることを明らかにした。全国的にスクールソーシャルワークは圧倒的に「派遣型」が多いが、本研究結果は、今後、派遣型SSWerのあり方を見直す、あるいは検討していく必要があることを示唆しており、全国のスクールソーシャルワーカー活用事業にも影響を及ぼすものであると言える。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study is to clarify the difference in the effect by the placement patterns of school social work. Regarding the research method, we interviewed school social workers and then conducted a qualitative analysis.

As a result of the analysis, the structure of each activity of the “dispatch-type” and the “placement-type” school social workers was illuminated. Examining the above two types of school social work process, it became clear that the “dispatch-type” school social workers carry out “limited social work”.

研究分野：社会福祉学

キーワード：スクールソーシャルワーク スクールソーシャルワーカー 配置型 派遣型 効果

1. 研究開始当初の背景

近年、小・中学校における子どもの問題行動や児童虐待等への対応において、他職種・他機関との連携や協働が求められている。また、児童生徒が直面する問題は、多様化・複雑化し、学校現場には福祉的な支援が注目されるようになった。このような背景のもと、2008年度から文部科学省はスクールソーシャルワーカー活用事業を開始している。筆者はこれまでスクールソーシャルワーカー（以下、SSWer とする）として活動する中で、様々な困難に直面してきた。その都度感じることは、専門職として SSWer が確立していないこと、また、SSWer に関する認知度の低さが背景にあるということだ。また、筆者自身は、SSWer の配置タイプの違いがスクールソーシャルワーク（以下、SSW とする）実践や活動内容に差をもたらし、支援結果の良否につながった経験を数多くした。このため、研究における関心も自ずと SSWer の配置タイプによる効果の違いに向けられた。

2015年の日本学校ソーシャルワーク学会の調査によると、全国における SSWer の配置タイプは、全国的に「派遣型」が多く、「配置型」が最も多いのが四国の 42.3%、続いて九州・沖縄が 37.2%となっている。しかし、この調査では配置タイプを尋ねているだけで、配置タイプと事例の関係は明らかにされていない。また、山野（2015）によって SSWer の効果的援助要素が明らかとなり、SSWer の具体的な動きがわかってきた。しかし、その効果的援助要素と SSWer の配置タイプとの関係、また、効果的援助要素がどの事例に対して有効であるのかは明らかとなっていない。そこで筆者は、SSWer の配置タイプと事例との関係を明らかにしたいと考えた。つまり、SSWer の配置タイプが、子どもや保護者の支援のためのネットワークの形成と援助のプロセスにどのような影響を与えており、さらに、SSWer のそれぞれの配置タイプがどのような事例に対して効果があるのかを明らかにしようとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教育現場で配置が進む SSWer の効果的な活用の在り方を検討するために、SSWer の配置タイプ、つまり、配置型 SSWer、派遣型 SSWer それぞれが、どのような事例（例えば児童虐待、不登校、非行など）に対して効果があるのかを明らかにすることである。具体的には、「配置型」、「派遣型」それぞれの SSWer が実際に扱った事例とその動きについてインタビュー調査を行い、それらを分析、比較検討することで、効果の違いを明らかにしようとした。

3. 研究の方法

(1) SSWer へのインタビュー調査

SSWer の配置タイプが、子どもや保護者の支援のためのネットワークの形成と援助のプロセスにどのような影響を与え、さらにどのような事例に対して効果があるのかを明らかにするために、2018年5月～2019年9月の間、関西と福岡において現任の SSWer へのインタビュー調査を実施した。インタビュー対象者は計6名で、分析方法は定性的分析（村社 2011）を用いた。

(2) 教育委員会や学校および関係機関等への聞き取り調査

教育委員会へのヒアリングは、2019年8月に福岡県教育委員会および福岡市教育委員会に対して行った。福岡を選定した理由は、SSW 先進地として SSWer の配置が進んでいたからである。学校へのヒアリングは、インタビューに協力いただいた SSWer を通じて、SSWer が入ることによって学校側にどのような変化（効果）があったかを伺った。また関係機関については、学校と同様に、SSWer が入ることによってどのような変化（効果）があったかを、NPO で子ども食堂を運営する責任者にお聞きした。

(3) 現任 SSWer との定期的な研究会の開催

2018年度からは、筆者を含む SSWer 仲間と SSWer のスキルアップを図ることと、次世代を担

うSSWer育成のための研究会（通称SWIS）を立ち上げた。その中で、筆者の研究を検証する機会を適宜設け、研究内容の修正や確認を行った。

4. 研究成果

(1) SSWer へのインタビュー調査結果

SSWer へのインタビュー調査の結果、まずは派遣型SSWer（図1）と配置型SSWer（図2）の活動の構造が異なっていることが明らかとなった。ソーシャルワークの展開過程に照らして検討すると、配置型SSWerでは、ケース発見からターミネーションまでの一連のソーシャルワークの過程を展開・実施しているが、派遣型SSWerでは、多くの場合、ケース発見は学校側で既になされており、SSWerが関わるのはアセスメントとプランニングであり、モニタリングの実施にまで至らない。つまり、本来のソーシャルワークが展開できていない、「限定されたソーシャルワーク」を実施していることが明らかとなった。

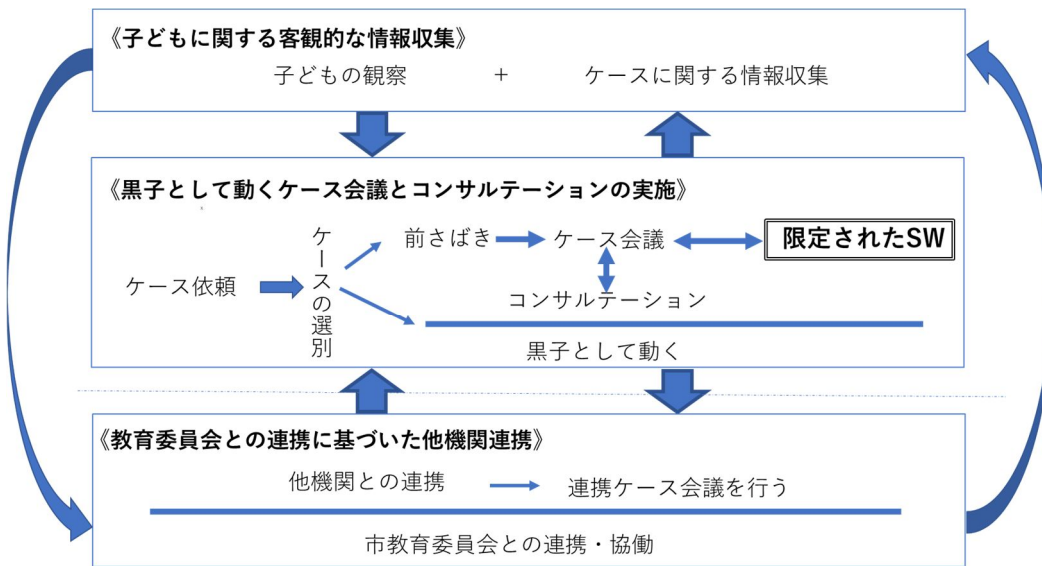


図1 派遣型SSWerの活動の構造

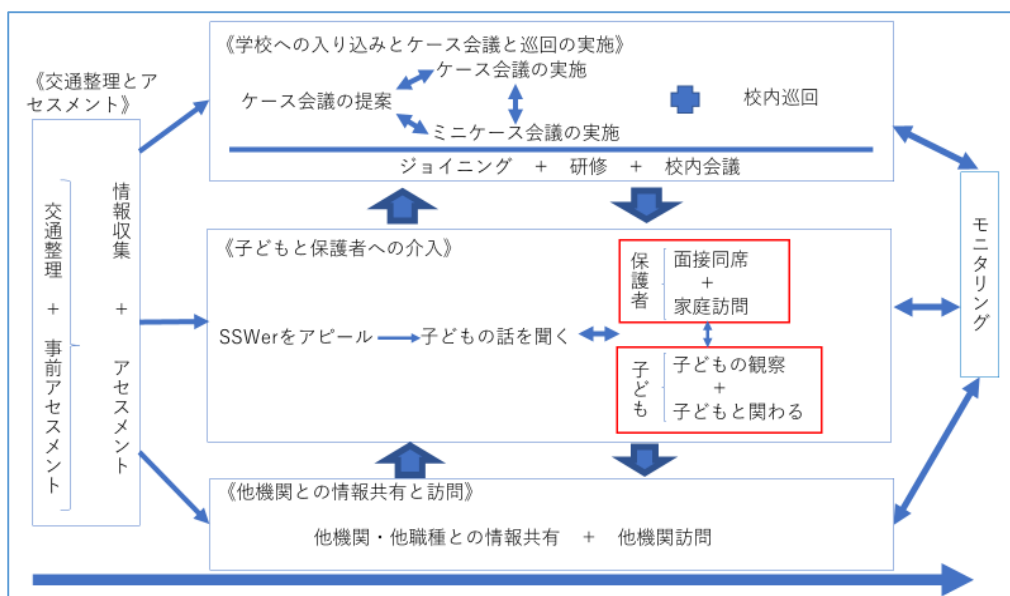


図2 配置型SSWerの活動の構造

(2) 教育委員会やその他の機関等への聞き取り調査結果

教育委員会へのヒアリング結果では、まず、福岡県教育委員会では、県としてこれまで SSW 事業をどのように進めてこられたのかをお聞きし、市町村との連携やバックアップ体制について伺った。また、福岡市教育委員会へは、2019 年 4 月から 7 名の SSWer を初めて公務員として正規雇用されたことを踏まえ、活用事業が始まった 2008 年から着実に SSWer の数を増やし、2019 年には SSWer を市内全中学校区に配置できるまでになった要因についてお話を伺うことができた。福岡市がこのような成果を挙げてこられたのは、SSWer が「配置型」で学校に入り、直接支援を含む活動を丁寧に行われてきたこと。そして、学校側が SSWer を受け入れる素地を作り、学校サイドから「SSWer をもっと配置してほしい！」と強く要望したこと等である。つまり、SSWer だけでなく、学校をも巻き込んだソーシャルアクションが展開されてきたことが大きい。

次に、SSWer と学校が連携し成果を上げた一例を挙げる。それは、SSWer が支援する子どもで発達に課題がありそうな子どもに対して、保護者の同意を得た上で、病院等にかかることなく、SSWer が協働する臨床心理士の協力を得て、WISC 検査を実施したケースである。結果、本人自身が自分の特性を知る機会となり、自己理解を深めることができた。また、支援者側にとっても、子どもの特性を知り、共有することでチームとして支援を展開していくことができた。何よりも発達検査が迅速に実施できることは、保護者のモチベーションを維持することにつながる。さらに、医療で発達検査を受けると何らかの診断名がついてしまい、保護者がそれを恐れたり懸念したりするが、そのような心配もない。つまり、治療や投薬の必要がない場合は、医療機関外での発達検査はたいへん有益であると言える。

最後に、SSWer と他機関との連携の例では、子ども食堂や子どもの居場所作りを積極的に行っている NPO の運営責任者へのインタビューから、「SSWer は常駐していないが、SSWer が関わることで、ソーシャルワーカーの基本的な“つなぐ”という機能、つまり、人と人をつなぐ、あるいは、人と機関をつなぐということにおいて大きな役割を果たしている」ということがわかり、それは、特に貧困家庭と学校がつながる場面において顕著に現れることがわかった。

(3) 現任 SSWer との研究会の成果

「配置型と派遣型ではそもそもインプットとアウトプットの仕方が異なるのではないか？」という問いから、ブレインストーミングで「配置型」、「派遣型」それぞれの SSWer の動きを出し合い、それぞれのメリット・デメリットを整理した。その結果、配置型 SSWer と派遣型 SSWer のメリット・デメリットは裏と表という関係であることがわかる。SSWer の立場からは、配置型は、子どもに直接会うことができ、やり取りが可能であること。また、子どもの権利条約にある「意見表明権」の尊重ができるなど、SSW が重視している価値に則した活動ができることからメリットが多いと言える。しかし一方で、教育委員会サイド、いわゆるスクールソーシャルワーカー活用事業を展開する自治体の立場からは、配置型は SSWer の人材確保に加え、派遣型に比べて費用がかかるという最大のデメリットがある。加えて、SSWer の中にも誤った考えが浸透している。それは、派遣型 SSWer では多くの場合がケース会議を行うため、ケース会議を上手く回せること、あるいはケース会議を多く捌くことが、イコール SSWer として機能していると誤認することだ。そこで、次に「SSWer の力量とは何か？」という問いにぶつかるが、これについては、今後も研究会で議論を重ね検討していきたい。

(4) 本研究の限界と今後の課題

本研究では、「配置型」、「派遣型」それぞれの SSWer の活動の構造が異なっていることを明らかにすることができた。しかし、それぞれの配置類型と事例との効果の違いを明確にすることはできなかった。「配置型」、「派遣型」それぞれの SSWer が個別に扱う事例の違いは存在するが、サンプル数が少ないこともあり、それが「配置型」、「派遣型」による差であることを明らかにすることは現時点では難しい。この点は今後さらに研究を進めていきたい。また、本研究の限界として、本研究はいわゆる SSW 先進地と呼ばれるところの地域を対象としており限定的である。よって、日本における「配置型」、「派遣型」SSW として一般化することはできない。今後は、SSW が進んでいるとは言いがたい地方においても研究を進め、継続してこのテーマを検証していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山口倫子	4. 巻 3
2. 論文標題 派遣型スクールソーシャルワーカーの活動に関する研究-スクールソーシャルワーカーへのインタビュー調査から-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 島根大学人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口倫子
2. 発表標題 スクールソーシャルワーク実践の類型に関する実証的研究
3. 学会等名 日本社会福祉学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山口倫子 他12名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 今井印刷	5. 総ページ数 196
3. 書名 地域が抱える“生きづらさ”にどう向き合うか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----